

優秀賞

仕事にほろりを持って

福岡県 小郡市立三国小学校五年 小柳 とうこ

私は祖父に会った事がない。私が生まれた時にはもうこの世にいなかったからだ。先日、父が一本のビデオを見せてくれた。伝説のバス運転手と言われる祖父の半生を特集した三十分のテレビ番組だった。番組には、私の父とバスの乗客の方々、同じ職場の人が出ていた。みんな祖父の事を話す時には、笑顔になっていた。そこから祖父がとっても愛されていたことが分かった。

花のきれいな理はつ店の前を通る時、バスを一旦停止して、外のマイクで、

「いつも、きれいなお花ありがとうございます。」「と言っていたこと。おばあちゃんがバス停に向かっていたら、バス停でもないのにバスを止めて乗せてくれたこと。乗客一人ひとりの顔と名前、さらに家族構成まで知っていたこと、バスの車内でふざけている学生を見ると

「そのの、青年！」
と、よく説教していたこと（祖父が生きていたら、私はしょっちゅうおこられていただろう）。どれも、今ではだめな事だけど、祖父は乗客を思えばこそ自然としていたことだと思う。

運転席のまわりにはいつもいたき物があって、それを乗客の人におすそわけしていたこと。祖父の運転しているバスに乗るため、時間を合わせていた人もいたこと。私がスゴイと思ったのは、今では当たり前になった「おはようございます」というあいさつをマイクで言うのは、祖父が始めたということだ。

みんなに愛された祖父だが、実はそのうらでは病と戦っていた。四十代初めに肝炎を発しようし、それから肝こう変、肝ぞうガンへと進行したのだ。いたみがひどくなり、乗客にめいわくがかかるか

らと運転ができなくなった時、自分自身納得して
たけれど、やはり運転がしたかったのか、息子であ
る私の父に

「ハンドルを病院に持って来い。」

とお願ひしたという。ハンドルは、祖父にとって元
氣の源だったのだろう。

二月二十六日、祖父は五十三才という若さで亡く
なった。その日のうちに、だれがはったか分からな
いけれど、祖父のなれ親しんだバス停には、祖父の
ことを伝えるはり紙がはられ、家にもたくさんの方
がお別れに来たそうだ。

番組の中で一番心に残ったのは、「仕事にほこり
を持って」という言葉だ。仕事を本当にほこりに思っ
ていたからこそ言える言葉で、自分のつらさを見せ
ず、だれにもマネできないやり方で仕事に取り組ん
だ祖父を私はほこらしく思う。まだどんな仕事につ
くか分からないけれど、祖父を見習って、自分の仕
事にほこりを持ちたい。もう祖父には会えないけれ
ど、私の中に祖父はいるのだから。

